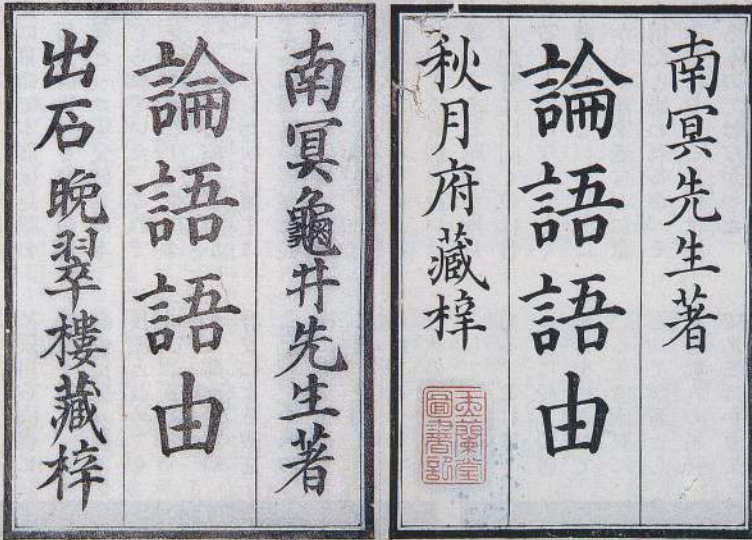


季能古博物館だより誌



上掲は、亀井南冥著『論語語由』の秋月藩本と、同版木を譲り受けた同書第二版「但馬出石藩本」の表紙である。同版木は第三版使用から民間の書籍商に移ったことは、本誌3頁に詳記あり。

亀井学を大成した

### 大儒 亀井昭陽伝 (五) 庄野 寿人

- ・「西都雅集」補遺
- ・論語語由の江戸出版
- ・道徳経済合一と論語語由(渋沢栄一氏)
- ・昭陽・秋侯に従い東上
- ・「語由」の重版

昭陽と原古処(秋月藩儒者)に実行を任された秋月藩侯による「西都雅集」書画展は、前号に述べた通り盛況であった。江都、京坂では寛政初期頃から盛んに書画会開催が目立つようになるが、すべて町方(多くは書籍商また書画好きの裕福な町人を胴元にし絵師、学者文人が協力する)によって、料亭の広間を会場にする。従って、会席、宴会が再三催される。このため寛政の改革で一時期停止と取締りの対象にされたことがある。

これらに諸藩士の出展は、まずない。上級武士たちは変名(別号などをつかう)で出品した。

「西都雅集」の場合には、藩侯と二公子、これにお国御前と呼ばれる森寺氏(国元の側室で子女、とくに男庶子出生があると江戸の正夫人に準じる待遇になる)の出展もある。余談であるがこの森寺氏は淑徳で内助

の功あり。藩中に別家を立てられ、藩士(中老小川家)から養子を迎え子孫は同藩士として明治に至った。また、同展には秋月はもとより本藩からの応募も多く、社寺、医家、町衆では松永子登、奥村玉蘭の出展は目をひいたと思われる。

秋月藩主も満足で昭陽、古処両人に褒詞と慰勞を賜わり、君臣よく後日談にされたであろう。

吉田平陽(昭陽門人で後に秋月藩財政記録『国計亀鑑』を作る)は、自らの記録に「四月大陳書画於太宰府」とした。会者二百八十余人、費銀十八貫五百二十五匁、と。

銀六十匁を金一両として金三百八兩三分の出費である。秋月藩財政は当代藩主の後半、やや赤字に転じ本藩に此の年九月、二千兩の協力を求め、さらに同十一月博多町家に壹萬兩を借入れた。

当時、本藩主は七代藩主治之公の

写真 杉山 謙

死去後、八代藩主は就任六カ月で病死、次の九代藩主幼少のため分家秋月藩主長舒公に幕命で本藩後見職および福岡藩の最大課役にされる長崎港警固（佐賀藩と一カ年交替）に本藩主代理を命じられていた。これで秋月藩の参勤交代による江戸滞在は六カ月（普通一カ年）短縮を幕府から認められた。こうした秋月藩主による本藩後見と長崎警備の巡察は長期にわたった。このため代償（二千両）を本藩に求めたのである。

また、秋月藩および同藩主による亀井家と昭陽に対する特別な扱いは別として、本藩主である昭陽が秋月藩行事に手強い加勢に出向くのは普通に認められることではない。とくに支藩主の本藩後見職という状況に於て秋月藩主から本藩家老などに意を通じ承認を得たと思われるが、それでも昭陽の本藩における立場は決して有利なるものではなかった。

同年十月、かねて昭陽に内意を伝えられていた秋月藩主による父南冥の名著『論語語由』稿本の出版を江戸に於て実施。よって昭陽に同書版刻に要する校正のため、藩主の江戸参勤に同行を求められた。秋月藩主の長舒は、同書が多く論語註釈本に比して格別に優れた内容であると

理解してのことである。このため侯自ら同書に序文を付し、後嗣の長房（後に長昭と改め）も同じく序文を、また藩家老宮崎舒安による跋文（書物の本文の後に推奨を書くこと）を加えられた。こうして公然の秋月藩本としての出版である。これは、本藩に於て蟄居処分を科されている著者南冥にとつて学者としても最大の名誉であるばかりでなく、亀井学とその一門に、この上はない喜びと誇りにされる。昭陽は、九月廿五日、門人の中野左逸と三苦源吾、これに奴

### 東遊賦

受秋英之託先覺我將遊東方是謂之俄  
蘇子樂懸帆又有孫父於舞之勸我之毋欲歌  
以治裝惟西向陽月有甲申之禮以行僕揚  
揚以策馬兮輝以山出疆豈憂城而難地兮  
視海波風盈帆既視門道親則子獨我師子德  
城故舊兮昔我子之夏上琴瑟五於行也上氣  
蘇此言高小瀾踏飛陽雖六之盤現之飛鳴  
蘇此言瀟瀟迴瀟瀟之城後之環三備之遠鳴  
蘇此言不可追兮飲步後之飛俗咸半四之枝  
蘇此言君子之倚兮飲甘密于道兮道兮飲風  
于伊臨兮沁環其和沫兮覺肝肺之化也遺遊  
路兮覽兮有感先之昔獨遊明兮長高砂  
兮山水宿宛于八日須摩清平即鳴兮村西松  
風兮引雲雲思兮駕龍兮雲兮其兮花林  
柳將于溪川兮奈花兮入秋從東 聖帝之古  
蘇此言披瀝那于海兮橫八面之長橋兮蘇之

上蘇此言獨遊深于高兮飲馬樂帆于夕飲兮陰  
入骨體于天二度兮飲以祀祀兮斗酒入神拓  
蘇此言龍吟兮而小田兮劇北條兮情阻沈沙  
酒兮而日雨兮兮蓬瀛兮鳴兮飲兮吟兮技兮  
大蘇此言親留風兮歸兮歸兮歸兮歸兮歸兮  
過海歸五十二兮仲兮之望兮和體體面兮遊  
之神望兮飲于兮而望兮和體體面兮遊  
蘇此言良辰其建正于高月兮朝堂嚴兮唐虞  
侯神神吟兮實符兮東馬既歸兮隨隨隨隨  
紀于青野兮百拾班兮張之彼今流國兮非兮不  
對兮兮物運觀兮之即而兮兮兮兮兮兮兮  
蘇此言惟此觀天也之精兮兮兮兮兮兮兮  
且也兮其二八之姿兮兮兮兮兮兮兮兮兮  
後世之聖也  
文化三年冬十一月 祝前能井是元鳳題

おこわり「東遊賦」の写真掲載は、本誌々面の都合で全文の頭書部分と末尾の年月と昭陽署名部分にとどめた。

久八の三名を従えて、百道を発し秋月侯の行列に加わる。十一月十五日、江戸に着き、秋月藩邸に滞在。秋月侯からは要務の余暇、自由に行動せよ、と懇篤に申渡された。昭陽にとつて生涯唯一の江戸旅行であった。また往路は東海道であったが、道中滞在の宿場本陣の使用は、藩主のほか側近、道中支配役と重役級に限る中に昭陽も部屋を与えられた。また、道中の公務要件が済んだ後は、昭陽を話相手に召されることが多く、とかく公の旅泊りの退屈を有益に、かつ楽しくしたと昭陽に聞かされた。又、帰路は中仙道にし山路の滞在中も趣があるかと教えられる。

解くるを嘉し、懸孤の祥あるを樂しむ。父は梓舞して以て我れを励まし、母は敏敏て以て装を治る。これ丙寅陽月吉、甲の龜我れ以て行く。僕は揚々として以て馬に策うち、故山に掛して境を出づ。豊城を越て柁を縮ままにし、硯海の波風航を盪かす。穴門に踵り遂に周を觀し、我師を徳域に謁す。故旧は雲集し予に餞し、古琴を愛して正声を振う。右の東遊賦は、秋月侯のさらなる恩愛によって、思いもよらぬ東都に赴くことになった。これまさに世間の網から解き放された喜楽を満喫する、と。父は手足ともに舞わして我が行を励まし、母は喜色を見せながら私の旅装を揃えてくれる。丙寅の年、陽氣満つ吉祥の日に、馬上揚々として馬鞭を当てながら國境を出る。：中略：周防・徳山城下に至って、我が旧師の役氏に面謁すると、既に古く親しい学友、子弟たちが多勢集まつており、予に餞けすべく、送別の宴を盛り、古琴を鳴らし正調の吟声高らかにする。：以下略：昭陽の江戸に於ける『論語語由』の出版作業は、同行の二門弟に手伝わせ、版下師（版木を彫る職人の頭



# 淡窓亀井塾入門見聞実録 (上)

広瀬淡窓(十六歳)は亀井塾入門および以後の見聞を詳細に自記録『懐舊樓筆記』にとどめ、今日に好資料を与えてくれる。

ここに淡窓の亀井塾、南冥と昭陽父子から同門諸弟におよび、また塾内の状況など活写の一部を抄録して参考に供する。

淡窓の原文はすべて片仮名づかいである。

## よ り だ 館 物 博 古 能

「寛政九(二七九二)年八月十五日。秋月ヲ発シテ、太宰府ニ至リ泉屋ト云フ旅店ニ宿ス。泉屋楼上ニアリテ、中秋ノ月ヲ見タリ。其翌太宰府ヲ発シテ、博多ヲ過ギズシテ間道ヲ取り福岡ニ赴ク。亀井ノ宅ハ福岡唐人町ニアリ。予、左仲ト共ニ旅店ニ留マル。左仲紹介シテ、昭陽先生ニ入門シ、謁見ヲ遂ケタリ。先生、名ハ昱。字ハ元鳳。通称長太郎、月窟ヲ号ス。後ニ空石・昭陽・天山ノ諸号アリ。時ニ年二十四。予ニ長スルコト九歳ナリ。南冥先生ハ塾居ニテ旅人ヲ見ルコトヲ禁セラレタリ。故ニ相見ヲ得ス。左仲ハ先年佐谷龍山ニ家族トナリシ故ニ、嘗テ彼塾ニモ留マリ、相見モ得タリ。時ニ塾仲諸生十餘輩アリテ留マレリ。舎長ヲ久野善次ト云フ。年十九ナリ。才学一時ニ冠タリ。既ニシテ、左仲ト姪ノ浜ニ行キ、大年ヲ訪フ。昭陽ノ季

弟ナリ。名ハ萬

字ハ大年、幼ナ

キ時、萬三郎ト

称ス。時ニ年二

十、医ヲ業トセ

リ。才気拔群ニ

シテ最モ詩ヲ能

クセリ。色白ク

シテ雪ノ如ク、

眼光炯然トシテ

人ヲ射ル。美男

子ナリ。

其後八月二十

日ニ至ッテ、左

仲ト博多ニ至リ、

永寿院曇栄禪師

ヲ訪フ。禪師名

ハ宗暉、幻庵ト

号ス。南冥先生

ノ弟ナリ。元崇

福寺ノ住持ナリ。

広瀬一門合装屏風(右から、広瀬淡窓詩書、平野五岳自題画、広瀬青郎詩書、三洲自題画、広瀬林外詩書、広瀬旭狂(没)のため三松子並に五岳の代画賛



大ニ目ヲ驚カシ未嘗有ノ壯觀トス。且ツ城池ノ雄麗ナルヨリシテ、海浜ノ風景ノ明眉ナル、一々心ヲ悦ハシメ、恍然トシテ仙境ニ入ルカ如シ。畢竟三都(江戸、京

都、大阪をいう)ノ盛ナルニ比セハ十カ一ニモ至ルマシ。然レトモ、其後多病ニシテ遠遊スルコト能ハス。遂ニ北筑ヲ以テ、眼中第一ノ壯觀トスルニ至ル。是レ佐伯ヲ以テ、遠遊トスルト同一ノ事ニシテ、平生遺憾ノ大ナルモノナリ。

予、生来ノ旅行、東北ハ宇佐ニ至リ、東南ハ佐伯ニ至リ、西北ハ太宰府、西ハ田代ニ至ル。皆小邑ニシテ人家千ニ過ギズ。ココニ至ッテ、初メテ博多、福岡ヲ見ル。人家二萬。街区ノ長キコト、殆ト二里ニ及フ。閣巷(リヨコウ)街区に同じ)ノ繁華モ、之ニ準ジテ知ルベシ。

一丁程(約一〇八米)後ニ、手拭ニテ面ヲ包ミタル男来レリ。其様、怪シケナリ。其男ヨウヤク近ツキ、予ヲ顧ミテ云ヒケルハ、郎(若者をいう)ハ何方ノ人ニシテ、何方ニ行クヤト聞ク。予フクオカニ行クト告ケタレハ、其人曰ク、我ハ湯町(二日市、湯町のこ)ニ行ク者ナリ、

イマ退隱シテコ、ニ居レリ。年頃四十七八ナリ。詩ト書ヲ善クシ、其名高シ。其詩ヲ誉ムル者、南冥先生ヨリ勝レリト云ヘリ。書モ亦頼春水ト並ビ称ス。福岡ニ留マルコト、中間六日。左仲ト共ニ彼地ヲ発シ、左仲ハ筑後ニ赴キ、予ハ日田ニ帰レリ。予、生来ノ旅行、東北ハ宇佐ニ至リ、東南ハ佐伯ニ至リ、西北ハ太宰府、西ハ田代ニ至ル。皆小邑ニシテ人家千ニ過ギズ。ココニ至ッテ、初メテ博多、福岡ヲ見ル。人家二萬。街区ノ長キコト、殆ト二里ニ及フ。閣巷(リヨコウ)街区に同じ)ノ繁華モ、之ニ準ジテ知ルベシ。

此年ノ冬。予再ビ福岡ニ赴ク。予ノ日田ヲ発スル時、先考(父をいう)予ニ命ジテ曰ハク。福岡ノ道ハ、コレ一七里、岐路ノ惑ウヘキモノナシ。且ツ汝已ニ一度行ケリ。此度ハ独行スヘシト。コレヨリ先キ、予遠方ニ行クニ皆従僕アリ。一里ノ道トイヘトモ独行セシコトナシ。独行シテ境(豊後と筑前の国境をいう)ヲ出ツルコト、此時ニ始マル。家ヲ出ツル日、中略(三又菅公ノ祠ノ前ヲ過ギタリ。即チ神ニ謁シテ、祈念シテ曰ク。童年、独行。心ツカヒナキニ非ス。神明、願ハクハ我カタメニ良伴ヲ賜ハレト。中略)

能古博物館だより

同行スベシトテ共ニ至リテ別レタリ。此夜ハ矢野素助カ家ニ宿ス。此人ハ森文龍ヨリ書ヲ添ヘテ投宿ノ事ヲ頼ミタリ。故ニ吾ヲ留メタリ。翌日、甘木ヲ発ス。素助ノ子、甘木ヨリ太宰府ニ月参スルナリ。子甚三郎、今日ヲ以テ彼方ニ赴ク。ヨツテ同行シ、太宰府ニ至リ。太宰府ニ投宿。翌日、太宰府ヲ発シ、独行シテ町ヲ出テ、一、二丁程行キ過ギシニ、後ヨリ声アリテ、前ノ人少シク止マリ玉ヘト云フ。予、之ヲ見ルニ、独リノ男走り来テ、予ニ向カッテ云ヒケルハ、某ハ柳川ノ者ニシテ、博多ニ赴クナリ、一切コノ辺ノ地理ヲ知ラス。方角ヲ問ハント欲スルニ人ナシ。貴君博多ノ道ヲ知りタル人ニ非サヤト云ウ。予カ曰ハク、我ヨク知レリ、先導スベシト。其人太ニ喜ビ、同ジク博多ニ至リ、之ニ別レ、予ハ福岡ニ着セリ。此行、数丁ノ道ヲモ独行ナシ。豈神ノ良伴ヲ賜ヒシニ非サヤ。帰路ハ我心已ニ穩ニシテ、疑イ慮ルコトナカリシカ亦一伴モ得ス。スヘテ児童ノ時ハ中心誠実ニシテ、イツハリナキユエニ、祈願亦応ズルコト多シ。壮年ノ後ハ得カラサルナリ。

速ニ見ルヲ得ズ。一兩日ヲ過キテ、先生予ヲ引見サル。：中略：福岡ニテ、同寮生。前後二十人ホトモアリシトゾオホユル。其ウチヲ挙クレハ、久野善次、星野順次、田代弥十郎、前田志摩、近藤聴節、篠田景山、森田退淑ナト、相熟シタル者ナリ。外来生ハ、母里恒五郎、青木玄丈、香江春龍ナトナト。又、江上芥洲ノ門人、天草ヨリ来ル者四人アリ。荒木彦太郎、尾上文治、道田莊松、江門兵作、其他枚挙ニ暇アラス。善次ハ叔父ヲ伝五ト云フ。百石ヲ領シテ木屋ノ頼ノ代官ナリ。太夫久野氏（亀井を登用した久野家老のこ）ノ別家ナリ。善次才氣アリテ、昭陽先生ノ意ニカナヒ、按ンテラレテ舎長トナリ、内外ノ書生ミナ其指揮を受ケタリ。其行状ニ至ッテハ、極メテ放逸無頼ナリ。其夏秋ノ間ニ至リテ伝五死シテ善次家ヲツキ、塾ヲサレリ。終年ニ至リテ種々ノ悪行アリテ、其ノ碌ヲ没収サレリ。当時存没如何ニヤ。順次ハ入地村ノ医師星野陽秋カ義子ナリ。陽秋ハ南冥先生ノ高弟ニシテ、德行ノ名アリ。余ハ順次ト相親シ。毎度其家ニ行キテ投宿シ、陽秋トモ相知レリ。（中略）弥十郎ハ筑後吉井西大庄屋ノ子ナリ。

志摩ハ前原ト云フ所ノ医師綾海ト云フ者ノ子ナリ。聴節ハ本姓原田、官医近藤氏ノ養子トナレリ。景山ハ官医温安ト云フ人ノ姪ナリ。退叔ハ塾ニ在ルコト最モ久シ。余ガ大婦ノ時モ、南冥先生ニ随ツテ医ヲ学ヒ、姪浜ニアリ。其後、郷里ニ於テ医ヲナス由キ、及ヘリ。恒五郎ハ義兄アリ、小助ト云フ、三百石ヲ領シタリ。恒五郎、時ニ年十五、亀門第一ノ才子トス。会談、文会、多クハ甲科ヲシメタリ。ソノ母寡居セリ。時ニ年三十二、三ナリ、容姿才藻アリ。文人書生等モ相交レリ。浣花園主ト号ス。其年、恒五郎故アリテ母ト共ニ国ヲサリ、他邦ニ漂泊ス。其後キ、シニ婦国セシトナリ。十二三年前、我門生亀井ノ塾ニアリ。原佐太夫ト云フ人ト同座スル。佐太夫コレニ語ッテ我昔、子ガ先生ト周旋セリ。敢テ一步モ遜ルコトナカリシカ、今彼ハ當時ノ名家トナリ、我ハ一無名ノ男子ナリ。我モシ成シテヤスマスハ、何ソ今日ニ至ランヤト云ヒシトソ。我云ハク、佐太夫即チ恒五郎ナリト。玄丈ハ町家ノ子ナリ。青木梅軒ノ養子トナレリ。春龍（現唐人町、香江内科の先祖なり）亀井ノ隣家道通ト云フ人ノ子ナリ。百五十石ヲ領ス。詩及ヒ書ヲヨクス。天草ノ四子、別

後消息ナシ。兵助ガ子太郎、後年予カ塾ニ来レリ。父ヲ問フニ死シテ久シト云ヘリ。亀井ノ居宅極メテ広シ。書塾数所アリ。棠文館。千秋館、潜龍舎、幽蘭舎、虚白亭、九華堂等ノ号アリ。往時盛ナリシ時ハ、六十余ノ生徒アリテ諸塾ニ満チシ由。余カ行キシ時ハ塾生十人ニスギズ。諸塾多ク空虚ナリシナリ。師家ノ隣、即チ府学ニシテ甘棠館ナリ。藩ニハ東西ノ学アリ。東学ハ竹田氏之ヲツカサドル。西学ハ亀井氏之ヲ主ル。即チ甘棠館ナリ。始ハ南冥先生教授タリ。塾居ノ後、江上源蔵教授トナル。其下ニ訓導三人、山口主計、後藤主税、亀井昱太郎ナリ。源蔵ハ、名ハ源、字ハ伯華芥洲ト号ス。天草ノ人ナリ。南冥ヨリ若キコト十五歳、篤行篤実、亀門第一ノ人ナリ。：中略：主計後ニ民平ト改ム。名ハ豊。字ハ士沛。唐津ノ人ナリ（実は佐賀県厳木町）南冥ヨリ若キコト二十歳。昭陽ノ妹婿ナリ。人トナリ夾快灑落ナリ。人説ニキ、及ヒシニ、初メ亀井長女ヲ以テ江上ニ妻セントス。江上之ヲ辞ス。後、次女ヲ山口ニ妻セントス。山口コレヲ受ケタリ。後年ニ至リ、江上ハ、亀井ト師弟ノ情乖離（かいり）

疎遠になること)セリ。山口ハ始終

全カリシナリ。予去年、筑に至リシ

時、山口ハ京師ニ遊シテ相見セス。

今年帰来、相見セリ。後藤ハ名ハ逸

字ハ士皞。南冥ヨリ若キコト十歳。

筑前ノ医師ニシテ富春ト称ス。後ニ

儒トナリテ仕フ。是モ相見セリ。筑

ノ先侯(前藩主・黒田治之のこと)

南冥先生ヲ草奔(民間・在野をいふ)

ヨリ抜テ教授トナシ、之ガ為ニ甘棠

館ヲ立テ、又ソノ弟子三人ニ新知ヲ

与エテ、之ガ副トナラシメ玉フ。其

寵遇オモシト云フベシ。

甘棠館ハ、其結構極テ齊整美麗ナ

リ。予、其玄閑迄ハ至リシモ、館内

ヲ周覽スルニハ至ラザリナリ。

(註)福岡藩は本支藩士以外の入学

を認めず、このため亀井家は家

塾を続けて一般の就学に応じて

いた。

翌年ノ春ニ至ツテ回禄(火災のこ

と)セリ。今、熟覽セザリシヲ恨ム

ナリ。

余カ始メテ塾ニ入りシ時ハ、昭陽

先生禮記ヲ講シ玉ヘリ。ソノ後、周

易、尚書、孟子アリ。時刻ハ、早朝

ナリ、飯後ハ、先生学館ニ出勤アル

故ナリ、三日ニ一度の会読アリ。コ

レハ夜中ナリ。出席ノ徒一四五人位

ナリ。月ニ文会三度、詩会三度ナリ。

余始テ至リシトキハ、彼ノ風ニナラ

ハス、挫折(くじけること)セラル

コト多シ。半年ノ後ニ至ツテ發達シ

タリ。

明春、帰省ノ時、先生余ニ語リテ

予ガ始メテキタリシトキハ、甚ダ平々

タリ。今ハ大ニ伸ヒタリトノ玉ヒシ。

余此秋ニ当リテ送田煖之ノ序評ノ

草稿、先生大イニ賞美アリ。コレ家

南冥詩勝文、昭陽文勝詩ト云ヘリ。

福岡ノ塾ニアリシ時、吉松求馬ト

云フ書生アリテ擯出セラレタリ。彼

レ舎長久野善次ト相謀リテ、柳町ノ

妓院ニ遊フコト数々ナリ。余人塾シ

テ潜龍舎ニアリ、善次ト同居セリ。

外ニ文郷ト云フ者居タリ。或夜、善

次、吉松ト共ニ柳町ニ遊フ。曉ニ近

クシテ帰来レリ。牆外ヨリ声咳シテ

リ。昭陽先生善次ガオヲ惜ミ、罪ヲ

吉松一人ニ帰シテ追放セラレタリ。

後ニ文郷余ニ語リテ曰ハク、余モ舎

長ニ誘ハレテ、止ムコトヲエズ、嘗

テ柳町ニ遊ヒタリ。彼ノ地ノ妓、皆

最下ノ品ナリ。彼輩、何ソ感溺スル

ノ甚シキヤト云ヘリ。

此ノ年五六月ノ間、余福岡ヲ発シ

テ、筑後ノ吉井ニ遊ブ。…中略…入

地村ニ過リ、星野順次カ宅ニ宿シ、

遂ニ順次ヲモ伴ヒ、弥十郎カ家ニ来

ル。時ニ吉井ニ角抵場(相撲場のこ

と)アリ。彼ノ地ニ留ルコト数日、

角抵ヲ見タリ。ソレヨリ、余ハ独行

シテ日田ニ歸リ、家ニ留ルコト一日

ニシテ、復吉井ニ往ケリ。其時、家

人、余ガ日ニヤケテ面色ノ黒カリシ

ト、言語ノ筑前風ニ変シタルヲ驚キ

タリ。…中略…復福岡ニ赴ケリ。

藤佐仲ハ、今年ノ三月ニ当リ、福

岡ニ来リ、入塾セリ。留ルコト四五

ケ月ニシテ、故郷ニ事アリ。塾ヲ去ツ

テ東歸セリ。彼カ素志ハ、文章未塾

ナル故ニ、医門ノ著述ナリ難シ、故

ニ文ヲ学ハントナリシガ、遂ニ志ヲ

トゲサリシ。或人曰ク、彼昭陽先生

ノ意ヲ失ヘリ。故ニ罪ヲ恐レテ去リ

タルトソ。佐仲ハ詩ヲ能クセリ。余

頗ル記得セリ。

其比、佐谷龍山モ秋月ヲ亡命シタ



ニ藏セリ。南冥先生ハ、閑居シテ、  
医ヲ事トシ玉ヒタリ。士人ノ医ヲ兼  
ネルコト、筑ニ於テ其例ナシ。先生  
医家ヨリ出ツル人ナルヲ以テ、特命  
ニテ免サレシトソ。大年ガ医ヲ業ト  
スルモ、其業ヲ受ケツグ者ナリ。南  
冥ハ當時弟子ヲ教育スルコトナシ。  
時アツテ詩稿ヲ筆削シ玉ヒタリ。余  
詩稿ニ於テハ、南冥ニ覽ヲ乞ヒ、文  
稿ハ昭陽ニ覽ヲ乞ヘリ。時人ノ評ニ、

相凶ヲナス。文郷、往テ後門ヲ開キ  
入レタリ、二子、内ニ入ツテ曰ク、  
玄簡(淡窓のこと)ハ能ク眠リタル  
ヤ。文郷曰ハク、然リ。二子乃チ青  
樓ノ佳興ヲ物語リ、曉ニ至ル。時ニ  
余己ニ醒メタリ。息モ荒クセスシテ、  
熟睡シタル体ニモテナセリ。コレハ  
他日事露ハレタルトキ、余カモラセ  
シ様ニ思ヒ、余ヲ仇ニセンコトヲ恐  
レテナリ。果シテ其後露見ニ及ビタ

リ。二子ノ人物、相類セス。然レトモ帰宿スル処ハ相似タリ。龍山ハ年佐仲ニ長セリ。佐仲コレニ兄事ス。龍山ハ医術ニ精鍊セリ。佐仲ハ未熟ナリ。龍山ハ書ヲ讀ムコト佐仲ヨリ多シ。然レトモ、絶エテ文筆ノ才ナシ。又言論ニ長セズ。佐仲ハ初見ノ人ハ、ミナ其言論ニ動カサル。其虚実ヲ知ルニ至リテハ、人亦畏ル、モノナシ。

孟蘭盆ノ節ニ当リテ、塾生皆夜行シテ燈籠及ヒ諸戯ヲ見タリ。南冥先生ノ時ハ、塾ノ規約頗ル厳ナリシカ昭陽先生ニ至リテハ、絶エテ規約ノ事ナシ。唯、青樓ニ遊フ事ノミ、人皆其禁ヲ知レリ。此夜、随意ニ散歩シテ、博多ニ至リ、遂ニ柳町ヲ一覽セントス。余曰ハク不可ナリ。諸子曰ハク、妓ヲ買フノ禁アリ。妓ヲ觀ルノ禁ナシ。何ノ害カアラン。遂ニ同シク彼ノ地ニ至リ、青樓ニ入りテ、粉黛ノ列座シタルヲ縦覽シ、或ハ贊嘆シ、或ハ嘲弄ス。其ノ内ニハ、諸生ニ見知りタル者アリテ、彼ノ方ヨリ詞ヲカケシモアリ。余生來花街ニ往キタルコトナシ。唯コノ時ノミ、其地ヲ經歷シタリ。生涯ノ一奇事ナリ。故ニ記セリ。

八月。亀井大年肥後ニ遊フ。南冥昭陽二先生ヨリシテ、門生ニ及ブマ

テ、各送別ノ辞アリ。：中略：家ヲ発スルノ日、送ル者三二十人宴会頗ル盛ナリ。大年、熊本ニ至リ訪フ所ノ名家、村井椿寿、斎藤権之助、富田大淵、近藤守敬等。村井、斎藤ハ甚ダ款洽セリ。富田、近藤ハ議論合ハズ。柳川、久留米、田代、唐津ノ処々、経歴スル所、応接頗ル多シ。自ラ紀行ノ詩文各一卷ヲ著セリ。

此ノ年ノ九月。昭陽先生ニシタカツテ、久原ト云フ処ニ往ク。福岡ヨリ三四里モアリシトオボユ。其処ノ大庄屋ヲ岸边作右衛門ト云ヒ、其子ヲ藤助ト云フ。文字ヲ好メリ。因テ先生ヲ請待セリ。博多ノ谷口勲平ト云フ人、外ニ一ノ浪人ヲ同道シタリ。道ニ広田トイフ処ヲ過ル。呉綾ト云フ俳人ノ家ヲ訪ヘリ。余後ニ先考ニ物語リセシニ、呉綾ハ我モ知レリトノタマヘリ。久原ニテ医生某カ家ニ往イテ遊ヘリ。往返ニ日程ニシテ帰レリ。近年其家ノ子孫タル者、余カ門ニ入レリ。谷口ハ年四十余、槍術ニ長シタル人ナリ。今ハ疾ク没セシナルヘシ。藤助ハ如何ニヤ。此ノ年ノ春。先考博多ニ來リタマフ。余ヲ召シテ相見アリ。其冬、太宰府ニ至リタマフ。余往イテ見エタリ。其時ハ、我心ニ用事アリテ、來

リタマヒシトノミ思ヘリ。今ヲ以テ、思フニ、余カ幼年ニシテ膝下ヲ離レタルヲ以テ、思想ニ堪ヘス。数々自ラ出浮玉ヒシナルヘシ。親ノ子ヲ思フハ、子ノ親ヲ思フニ十倍スル者ナリ。

此ノ年、冬。余幽蘭舎ニアリ。風邪ニ感シタリ。大熱アリテ瞻言(うはごと)ヲ発シタリ。其症頗ルハケシカリシカ、程ナク愈エタリ。若シ家ニアリテ、コレ等ノ症ヲ病ミナバ、餘程ノ心ツカヒアルヘキニ、少年、且ハ旅中ノ事ナレハ何ノ頓着モ無クシテ事スミタリ。此夏、暑氣甚シカリシニ因テ、塾生相謀ツテ、井水ヲ汲ミアケ、之ヲ高キ処ヨリ、笕ニテ落シ其下ニ、散髪(結髪をほどく)裸体ニテ水ニ打タレタリ。大ニ愉快ヲ覚エ、晝夜トナク再々試ミタリ。

此年ノ冬。塾生婦リ盡シ、留ル者ハ南冥先生医事ノ弟子一兩人ナリ。儒學生ハ、余一人ノミ塾ヲ守レリ。寛政十年戊午。予年十七、福岡ニ在リテ春ヲ迎ヘタリ。二先生ノ膝下ニ陪侍セリ。他国ニ於テ歳ヲ守リ、春ニ逢フコト、是年ヲ以テ始トス。正月中、福岡ヲ発シ、日田ニ帰省セリ。姑ク父母ノ膝下ニ陪セリ。

余、家ニ在リ。二月初ニ至リ、復再遊セント思ヒシ所ニ、一日森田退

叔來リ、予ニ謂ツテ曰ハク、正月二十九日ノ夜ニ当リテ、唐人町ノ武平ト云フ者ノ家ヨリ、火出テタリ。此夜烈風ニシテ、延焼スルコト極メテ急ナリ。師家及ヒ甘棠館、一時二灰燼トナル。書籍ヨリ器用ニ至ルマテ一物モ遺ルコトナシ。師家モ大ニ狼狽シタマヘリ。故ニ某ヲ使トシテ、遠近ノ相識ニ、錢財ヲ乞求ム。某、昨夜隈町京屋半四郎ガ家ニ止レリ。コレヨリ、中国ニ赴クナリト、辞シ去レリ。余是ニ於テ、福岡ニ赴キ師家ノ災ヲ弔ス。半四郎ヨリ黄金二両ヲ余ニ托シテ師家ニ贈レリ。半四郎ハ亀井ト相識ニハ非ス。唯一度画贊ヲ南冥先生ニ乞ヒシナリ。時ニ先考モ金一兩ヲ贈リ玉ヘリ。

余、福岡ニ着シ、唐人町ニ至リシニ、学宮ヨリシテ諸塾ニ至ルマテ、唯一片ノ赤地トナレリ。先生父子、正ニ瓦礫中ニ席ヲ敷キ、朋友門生ト共ニ、痛飲シテアリシナリ。南冥ハ時ニ起ツテ舞ハレタリ。昭陽ハ己ニ酔臥セラレタリ。余カ至ルヲ見テ、起座シ余ニ告ケテノ玉ヒケルハ、我家一切蕩盡ス。子カ旅装ノ塾ニ留メシモノ亦遺ルナシ。浮世ノ變遷、從來カクノ如シ。何ソ驚クニ足ランヤ。然レトモ多年力ヲ盡セシ著述、皆鳥有ニ帰セリ。コレ恨ムヘシ。但シ老

能古博物館だより

父カ著述ハ、余、災火ヲ侵シテ之ヲ救ヒ得タリ。余カ作ハ、マタ再ヒスヘシ。何ソ深く恨ミシヤト。此時、亀井家ハ、姪浜ノ五島屋、橋本屋ナドニ散居シタリ。余ハ医生数輩ト、紙屋(姪浜・石橋氏)カ別業是韓堂ニ留マレリ。是ハ南冥先生カリ受ケテ當時薬局トセラレシナリ。余、二子ト同シク居ルコト、二二旬ニシテ、マタ日田ニ帰レリ。

余ステニ福岡ヨリ帰リテ後、姑ク家ニ留レリ。當時福岡ノ師家ニ講業ノ事ナク、塾生離散セシニヨリ、余モ亦急ニ遊フノ志ナシ。家ニアリテ光陰ヲ徒ニ送レリ。若シ此ノ時、独学研究セハ、遊学セシト、サマテ殊ナルコトアルマシキニ、其事ナクシテ、徒ニ日ヲ送リシ事、恨ムヘキノ至リナリ。…中略…

余、家ニ在リテ、久シク師家ノ消息ヲ聞カサリシカ、其後追々其事ヲ聞得タリ。甘棠館ハ、回祿(火事のこと)ノ後、長ク廢セラレタリ。西学ノ儒員、皆免職シテ平士トナリテ事フ。國中ノ学徒、盡ク東学ニ出ツヘシト、官命ナリ。従来東学ハ、竹田春庵ノ学風ヲ受ケテ朱学トス。西学ハ南冥先生ニ始マリ、古学ヲ主トス。二家ノ学風同シカラス。其弟子タカヒニ相識リテ、洛蜀(宋の時代、

政争した各派をいう)ノ党ヲナセリ。ココニ於テ、西学亡ヒテ、朱学ニ一統セリ。西学ノ諸生俊秀ナル者、青木玄丈、香江春龍カ輩ミナ東学ノ弟子トナレリトソ。余、是ニ於テ先考ト共ニ、田代ニ赴キ彼地ヨリ福岡ニ至レリ。

予、福岡ニ至リシニ、先生ハ彼地ニアラス。紙屋伊蔵ニアヒ、事ノ由ヲ尋ヌルニ、南冥先生ハ姪ノ浜ニアリテ、大年ト同居シタマヘリ。昭陽ハ姪浜五島屋ノ隣リニ土蔵アリヲ借り、寓居シ玉フナリ。余、姪浜ニ至リ、昭陽先生ニ謁ス。先生ノ寓居、甘古堂ト号ス。先生命シテ其玄関ニ余ヲ留メラレタリ。

此年ノ九月頃ト覚エシ。昭陽先生ニ陪シテ、前原ト言フ処ニ行ク。姪浜ヨリ三里ナリ。前田綾海カ家ニ一宿シテ帰レリ。時ニ志摩ハ他方ニ行ケリ。其弟、亀井家ニ往來シテ業ヲ受ケタリ。予綾海カ家ニテ、新兵衛ト云フモノニ相見ス。其後三十年を過キテ、其甥良助來リテ予カ弟子トナレリ。前原ハ、日田ヲ去ル二十里、是マテ予カ足跡ノ及ホセシ所ニテハ、極西ノ地ナリ。

南冥先生ノ二男、僧トナリシ者アリ。大年カ兄ナリ。予カ福蔵ニアリシ時ハ東遊セリ。後還俗シテ儒医ヲ

業トス。名ハ昇、字ハ大莊、雲來ト号ス。近來甘木ニ於テ開業セリ。昭陽先生予ニ命シ行イテ賀セシム。是ニ於テ、始メテ相見ス。時二年二十四。容貌雄偉ナリ。其学才ハ大年ト相伯仲セリ。亀井ノ兄弟三人、昭陽独リ醜シ。二弟ハ皆俊美ナリ…中略

此年十二月。予、姪浜ノ儒居ニアリ。寛歳ト共ニ蔵ヲ守ル。其頃生徒ナシ。唯予ト寛歳ト先生ノ許ニアリテ、輪講ヲ務メシナリ。

寛政十一年巳未。余年十八。姪浜ニ在リテ、南冥昭陽二先生ノ膝下ニ陪侍セリ。

二月姪浜ヲ辞シテ帰省ス。余筑前ヨリ帰ル時、田代ヲ過リ、永吉ノ梁井勘治カ家ニ留マルコト数日、既ニ発セントスル時、磯野俊蔵來リ訪ヘリ。是ハ南冥先生ノ旧門人ニテ、去年姪浜ニテ一面ス。三十有餘ノ人ナリ。俊蔵曰ハク、願ハクハ留ルコト一日シ給ヘ。余モ同シク甘木ニ至リ、亀井雲來ヲ訪ハント、乃チ旅装ヲ解ク。明日同シク甘木ニ至リ、雲來カ家ニ投宿ス。松崎ヲ過クル時、俊蔵吟シテ曰ク、疎烟三戸口積翠萬松中ト、頗ル詩ヲ好ム人ナリ。

予、筑前ヨリ帰路、星野順次ニ逢ヒ、之ヲ伴ナヒテ家ニ帰ル。予カ家ニ留マルコト数日ニシテ辞シ去レリ。

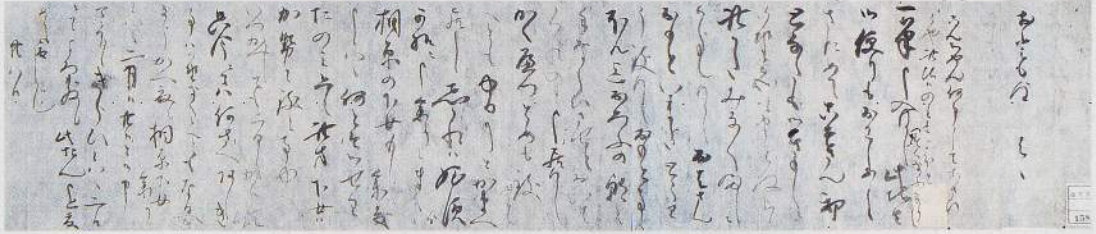
筑前ヨリ帰リシ時。館林文之進、病ニ臥シ危篤ナリ。去年、其兄東岳疫ニ没セリ。文之進為メニ其家事ヲ嗣ケリ。是ニ至ッテ一年、其身モ亦亦疫症ニ染ミタリ。文之進ノ妻、先ニ疾ヲ病メリ。而シテ文之進モ病起レリ。予行キテ問ヒシニ、已ニ言フコト能ハサリシナシ。予家ニ帰リテ數刻ニシテ、訃音至レリ。是ニ於テ其妻ハ、其三孤、清記、伊織、女良ヲ携ヘテ、予カ家ニ來リ南家ニ寓居セリ。時ニ清記十三歳、伊織八歳、良二歳ナリ。

館林文之進。本姓相良。中年ノ後、故アリテ姓ヲ改メタリ。没スル時四十二ナリ。此人若カリシ時、南冥先生ノ弟子タリ。俊才ノ称アリ、医術ヲ事トスルニ及ンテモ、詩文ハ廢セサリシ。予戚屬(せきぞく=親戚)タルヲ以テ、幼キヨリ常ニ往來セリ。予ニ長スルコト二十四歳。然レ共、予ヲ見ルコト朋輩ノ如シ。予カ十四五歳ノ時ニ當ッテ、或ハ市中ニテ行逢フコトアリ。予ヲ呼止メテ、詩ヲ朗誦シ、而ル後別レタリ。此人性質嚴格ニシテ家政モ密ナリ。一種ノ風趣在リ。前ニ述ベシ事ノ如キ、今時ノ医者ナト、決シテ無キ風儀ナリ。

(次号につづく)



少栗母の手紙



おとも様 は、

こんちゃん何事してあそひ候や 此比ハのミもよほと

すくなふなり申候

一筆申入れ候う 此比は御便りもおわし不申

さためてこそさん初

となたも御無事ニ

御座被成候半と存上候

此かたみな ふしに

くらし申候に おはさん

おもと いまとうり

う致候 おもと事ハ

ほん道おうふの願にて

手ならいさせておいて

くれとの申居候

かくへつとめも致不申候

へとも、ゆるりとかまへ

居申し しかれハ姪浜より

か様ニ申参候行ま、

桐原の下女も参り度

申しハ、何とぞ御せわ

たのみ上候 此方下女ハ

加勢と致候事ゆへ

いつかへしてもくるしからず候

只今ニては何さへ阿しき

事ハ御座なく候へともなるべく

なら、かへ度候桐原下女

参り

候ハ、二月ハ廿日と御申

可被下候 きらひ、ハ、二日

にてよる敷候 此たん申上度

め出度 かしこ

廿八日

◎母から少栗当ての手紙・解説

先号では、少栗母より娘婿の源吾宛三通を紹介した。今回は、娘少栗即ち友(とも)に宛てたもの、母からであるが、友と呼捨てにせず「おとも様、友之殿(この場合の之は発音にしない敬した付字である)」を使っている。

第一信の冒頭「こんちゃん」は少栗の一女、少栗母からすると初孫女の紅染(こぞめのこと) 一字の「こ」を「こんちゃん」の愛称にしていたことがわかる。「こんちゃん何事してあそび候や」、祖母、母ともに通じる言葉であり、此比ハのミもよほとすくなふなり申候は、当時の衛生状態では、のびが多く幼児をむずからしたであらうし、漸く気候が変わり蚤が少なくなり、ひと安心と言った心情がよくわかるのである。以下の本文は、平凡な、使用人、下女の出入りを通じた内容に過ぎない。

第二信は、前便に比べて大変入りこんだ内容となる。前置きに、口上とすることからも軽い手紙ではない。まず、娘少栗の帰りを待ち、そのおそひことを難んじる言葉に始まる。相成なる男が訪れ、もん(長男の

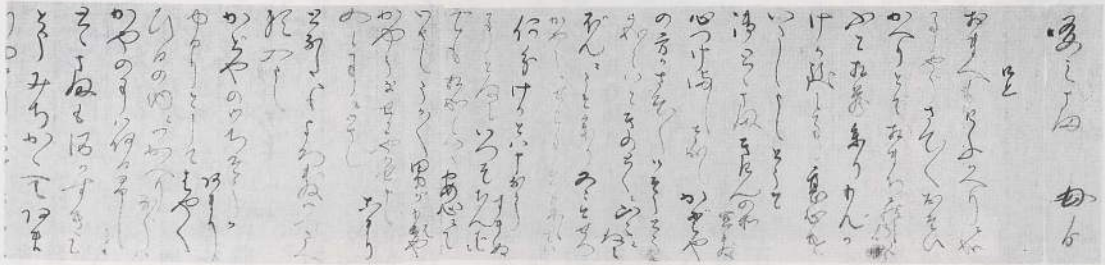
聞可もんか) が怪我をしたことを聞かされ、「甚だ心づかいする心情を述べ、以下切々と昭陽や、少栗がいる(かどや)の現場を案じている」子供の聞きわけのないことからの不祥事、それにしても夫君の昭陽に酒が過ぎ、腹だたいし気持も少し見せる切実さもうかがえる。

(結末は、本記事末に補足する)

昭陽妻のいち、少栗母の手紙十七通、これを読むまでは彼女に対して不安があったのは偽りないところである。しかし思い切って彼女に踏みこんで、さすが亀井家妻女として書も文も恥じない素養のひとつ、と安心した。子供八人、成人した二男四女のうち、彼女が最も頼りにしたのは少栗、これは当然である。

この娘に、母は忌憚なく、意見はスパツという。叱ることも呵責はない。しかし後に残るねじれはいささかもない。これらには、昭陽先生も時には一目おいた賢夫人であったと思われる。昭陽は、伯母の婚家先(早船氏)で、その末娘を妻にしたのである。妻のことは少女時代から、よく知り得たのは疑いないとされる。結婚後昭陽の妻への気くばりも、さこそと思われるものがある。

少柴母の手紙



友之さま

母より

口上

おまへもけふかへり二成る
事やらさそくおそひ
かへりとして相まち居候折から
ふと相蔵参り もんか
けか(怪我)負傷 致し候事甚心遣
いたし申し候 とうぞ
御と、さま(昭陽のこ) きけんの所宜敷
心つけまし可成候 かどや
の方か さそく御そうとう
被成候へと きのとくニ山々存候
ぼん二こそ参り 又このせつ
かやうせわ事 出来候てハ
何分けかとお申なからすまぬ
事と存候 いっそちんばニ
ても相成候ハ、安心ニて
御座候 うか、男がもはや
かやうなせわやかせ申 こまり
入候事ニ御座候
どなたへもよる敷御つたへ
頼み入り申し候
かどやのごちそうが、あまり
ゆるりとして はやく
ひるの内ニ御かへりならば
かやうの事ハある間しく候
と、さまも酒がすきて
とみちかへて あま

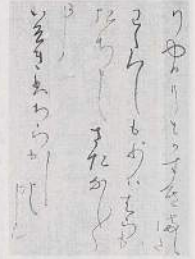
龍陽文庫・能古博物館友の会

- (福岡市) 天谷千香子④ 西嶋洋子④
岡部六弥太④ 村上靖朝④ 星野万里子④
小田一郎④ 吉村雪江④ 遠水忠兵衛④
財部一雄④ 桑形シズエ④ 田上紀子④
安松勇一④ 宮微男④ 上田良一④
西村忠行④ 高田浩二④ 片岡洋④
桑野次男④ 玉置貞正④ 石川文之④
木戸龍一④ 西島道子④ 和原則④
石橋七郎④ 藤木充子④ 和田慎治④
西川真澄④ 末松仙太郎④ 板木継生④
行成静子④ 鬼塚義弘④ 坂内泰滋④
橋本敏夫④ 三宅碧子④ 山内重太郎④
星野金子④ 中畑孝信④ 岩重二郎④
吉原湖水④ 岡本金蔵④ 青柳繁樹④
横山智一④ 宮崎集④ 都筑久馬④
吉村悦子④ 斎藤拓④ 石橋鏡一④
桃崎悦子④ 古野開也④ 西正憲④
林十九楼④ 大神敏子④ 安永友儀④
磯崎啓子④ 岩下須美子④ 土屋正直④
三角健市④ 織田喜代治④ 上田博④
西尾健治④ 伊藤康彦④ 石橋清助④
塚本美和子④ 長八重子④ 鶴田スミ子④
黒川松陽④ 寺岡秀實④ 柳山美多恵④
日野和子④ 岸洋子④ 前田静子④
田中和子④ 野口清子④ 肥塚善和
隈丸清次④ 古賀清隆④ 奥田稔
原丸種美④ 長尾茂穂④ 松尾治郎
川島貞雄④ 井上敏枝④ 平河治郎
石村マツノ④ 藤野幸子④ 富重芳子
葉山政志④ 星野玄④ 原田耕典
久芳正隆④ 藤島正稔④ 山口虎夫
吉富とき代④ 福田満須美④ 野口はつ
大山宇一④ 原敬道④ 鶴田俊隆
丸尾好幸④ 荒巻重義④ 高木千寿丸
富永紗智子④ 森野信一郎④ 児島順子
武藤瑞子④ 浜志げる④ 千代子
糸山好太郎④ 山口由利子④ 墨羊子
木原光男④ 荏山雅敏④ 森本憲治
(前原市) 田比章祐④ (大野城市)
伊藤泰輔④ 由代直輝④ (執行) 敏彦
久野敦子④ 山田都栄④ (春日市)
後藤和子④ 白水都 (筑紫野市)

- 山浦一郎④ 横溝清④ 川浪由紀子③
原富子③ (大宰府市) 中村ひろえ④
佐々木謙④ 古賀謹二③ 平岡浩③
西尾弘子③ 末松祐而④ 蔵田はつよ
(筑紫郡) 精誠(懐也)④ (粕屋郡)
榎田正己④ 榎田猶子④ 神崎憲五郎③
酒井俊寿③ 松本雄一郎③ 青木良之助③
友野隆② 鈴木惠津子② 川原敏子
長崎栄市④ 井手伽維子 (宗像市)
木村秀三④ 益手天藏③ (甘木市)
酒井カツヨ④ 井手太④ 井上清④
黒川邦彦④ 佐野至④ 宮崎春夫④
富田英寿③ 田中トクエ③ (朝倉郡)
鬼丸雪山④ 山崎エツ子② (飯塚市)
小山元治④ (浮羽郡) 吉瀬宗雄④
(大牟田市) 嶽村 魁④ (苅田町)
木下 勤④ 中島栄三郎④ 古賀義朗④
(筑後市) 柳野 巖④ (北九州市) 片桐三郎③
(柳川市) 樺島政信④ 庄野陽一④
山本利行③ (大分県) 寺川泰郎④
日本政宏 (長崎県) 浦上 健③
(熊本県) 濱北哲郎④ (佐賀県)
甲本達也③ (山口県) 大塚博久②
(大阪府) 小山 富美④ 前田敏也②
(愛知県) 杉浦五郎③ 辻本雅史
(神奈川県) 中野 暁③ 庄野健次③
(神奈川県) 片桐淳二④ 林田 睦
村山吉廣② 田中加代 (千葉県)
森 久④ (埼玉県) 丸橋秀雄② (宮城県)
田中 信彦③④

【協賛会員(個人)】

- 片桐寛子 (福岡)④ 中村 登 (福岡)④
大里豊男 (福岡)④ 広瀬 忠 (福岡)③
笠井徳三 (福岡)④ 永田蘇水 (福岡)③
菅 直登 (福岡)④ 大坪正治 (福岡)③
野口一雄 (福岡)④ 奥村宏直 (福岡)③
荒木靖邦 (福岡)③ 早船正夫 (福岡)③
安路光正 (福岡)③ 浄満寺 (福岡)③
梅田光治 (福岡)③ 沖 双葉 (福岡)③
熊谷雅子 (福岡)③ 七熊澄子 (福岡)③



りゆるりとかすきました  
わたくしも少ハはらも  
たち申候さたなし  
申候  
いそき書ちらかし申候  
かしく



もんか事きのふの参りハ  
いらん事ニ候 源吾様より  
御とめ被成候ニおしつけ参り  
何事なからねハ宜敷候  
かやうの事おきてハさそ  
おまへがきのとくニあらうと  
さつし入り申候  
源吾様へよろしく御申  
入頼申候 嗚々御めいわく  
のだんおしはかり  
かしく

●もん。長男聞可(もんか)のこと通称義一郎の幼名

(説明) 本件は亀井家萬曆家内年鑑に「文化十四年八月十日記事として、長男義一郎脚を折る」とあり、これによって本人は家督相続を除かれ弟鉄次郎(陽洲)に替わることになるが、これを予知した母親の気持ちが見え、また当時一緒に居合わせた昭陽に酒が過ぎていたことが、妻としての残念を娘少栗に気持ちを見せている。酒のせいであろうが娘婿の源吾が止めたのに押して子供の聞可(十二歳)のヤンチャが招いた出来事にされるが、母親の悲哀と腹立ちもうかがわれる。

上田 満(福岡)・亀井准輔(福岡)③  
木原敬吉(飯塚)③・具嶋菊乃(甘木)  
大久保津夫(嘉穂)③・庄野直彦(直方)③  
原田國雄(宗像)④・森光英子(久留米)  
西喜代松(北九州市)・中山重夫(唐津)③  
緒方益男(佐賀)④・七熊 正(佐世保)③  
七熊太郎(佐世保)③・伊藤 茂(宮崎市)③  
小堀定泰(滋賀)③・白水義晴(東京)③  
西村俊隆(東京)④・江崎正直(千葉)  
多々羅孝男(千葉)③  
会員ご氏名に④は、会費ご継続四年目をいただいたるしです。  
( )は多年分のまとめお払い込み、( )は増口数ご負担を示します。

【法人協賛会員および特別協力法人】

- 九州 電力 株・大野 茂(福岡)
- 株 新 出 光・出光 豊(福岡)
- 出光興産福岡支店・山本繁弘(福岡)
- 株 福岡 銀行・佃 亮二(福岡)
- 株 福岡中央銀行・山本敬一郎(福岡)
- 株 福岡 銀行・外形 病院・南川勝三(福岡)
- 法人 南川 製粉・福岡工場・白尾嘉弘(福岡)
- 日本製粉株福岡工場・村上五一(福岡)
- 福岡県警備業協会・村上一(福岡)
- 流通 共 済 株・花田積夫(福岡)
- タイム社印刷 株・安部博満(福岡)
- 株 笠 組・笠 忠夫(福岡)
- 博多ちくわ・株 魚嘉・松尾嘉助(福岡)
- 株 権藤 税理事務所・権藤成文(福岡)
- 株 協 通 配 送 株・富安 渡(福岡)
- 大牟田運送 株・南誠次郎(福岡)
- 株 三島設計事務所・三島庄一(福岡)
- 日 西 物 流 株・原 重則(福岡)
- 西日本急送 株・原 重則(福岡)
- 愛宕建設工業 株・野村六郎(福岡)
- 株 (有)愛光ビルサービス・野田和禧(福岡)
- 株 (有)クリーン開発・野田和禧(福岡)
- 株 延 寿 産 業 (有)池田邦夫(福岡)
- 株 九州三菱ふそう自販 株・宮崎慶一(福岡)

# 能古博物館の会

南安河内商店・安河内紀男(福岡)  
木原税理事務所・木原敬吾(飯塚)  
※新規のご加入(先号以後、平成五年十月三十一日現在)は、右の地区ごとに記載いたしておりますので、何卒ご芳名をご確認ください。  
友の会 年間3千円  
(館の活動、館誌購読と催事企画に参加)  
自然と文化の小天地創造

協賛会(個人)年間1万円  
〃(法人)年間3万円  
【館維持、資料収集、施設整備等の資金援助を受ける】

納入方法 郵便振替 福岡31660070  
財団法人 能古博物館  
右の会費受領は、その都度本誌に掲載以後会費相当期間を名簿にします。

【お願い】ご送金は振替用紙(送料加入者負担)をご利用ください。用紙はご連絡次第お送りします。

## 図書出版

### 『閨秀 亀井少栗伝』

詩、書、画の作品で仙居の次に多いのが同時代の亀井少栗。しかも少栗には艶麗な漢詩の恋歌まである。これが同女の作か否か。これに始まる探究の書である。

B5版・表紙布装美本  
限定 二、〇〇〇部  
直売頒価 三、〇〇〇円  
送料 三二〇円

文庫聖堂楷樹・植わる

楷の樹は、本誌で何度も紹介済であるが、これほど長寿が実証される吉祥木は世界にも希少であらう。

孔子の死後の翌年、孔門十哲の一人、子貢が師の墳墓の側に植えたのが楷樹である。子貢は墓の側で六年の喪に服していた。楷樹が何年生であつたかわからないが、植後から実に二四七一年を経て、なお変わらぬ樹勢が見られるという。

この樹がわが国に伝来したのは大正四(一九一四)年、国直轄の林業試験場の初代場長白沢保美博士によって、中国山東省曲阜の孔子廟から直接に種子を得られ、播種、育苗された。林野庁資料室に保存される当時の白沢博士報告書には「曲阜孔子墳墓上ニ直径三尺ニ達スル大木アリ。子貢手植ノ楷ト称スルモノ、即チ此ノ樹種ナリ」と記されている。

白沢博士によって育成された苗木は、中国哲学や漢学などを研究される先生方により孔子ゆかりの各地に植えられるが、なお林野庁林業試験場跡地が「林試の森」として公園整備される中、なお二本が残っている。次は、湯島聖堂に三本、聖堂境内の杏壇門前の左に一本、右に二本が

白沢博士播種の系統に入る。ほかに、その後の播種によるもの、また右の第二世代となる数本が生じ、見事な楷樹の叢林を形成している。

当文庫の孔子堂楷樹の二本は、当文庫が孔子堂創設の企画を多久聖廟に指導を乞う中に、同聖廟楷樹の保存に取組んでおられ同地の丹邱世世話人をされる服部政昭氏によって分苗をいただいたもの、多久聖廟楷樹は、即ち林業試験場に於ける白沢博士に分与を受けられたものを右の服部政昭氏が熱心な受精によって採種



と育成に努められたものである。

こうして考えてみると、当文庫孔子堂「楷樹」は中国曲阜孔子廟の原木から直系の曾孫、東京の林業試験場の渡来からは直孫ということになる。楷樹の花種は二十年を要すとされるので、当館では約十四年で成木を見ることになる。まさに悠久二千五百年の血統をひく生命永遠をいえる祝福を内蔵する銘木である。

文庫「孔子聖廟」創建

御寄付者芳名(本誌出刊現在)

- 【金拾万円】 和田慎治・早船正夫  
上田 満・庄野寿彦・片桐寛子  
安松勇一・溝口博義
- 【金八万円】 翠川文子
- 【金五万円】 今林 昇・安陪光正  
笠井徳三・大久保津智夫・石橋親一  
結城 進・花田積夫・中山一三  
松尾清美
- 【金参万円】 森光英子・西 政憲  
具嶋菊乃・酒井カツヨ・井手 太  
井手親栄・伊藤 茂・吉瀬宗雄  
中山重夫・井上 清・肥塚善和  
木下 勤・荒木靖邦・神崎憲五郎  
斎藤 拓・寺川泰郎・住吉啓一  
上田 博・野見山 薫
- 【金貳万円】 江崎正直・井手ゆうじ  
村上五一・疋田文五郎・吉松一成  
丸橋秀雄・庄野健次・上田良一  
浦上 健・若下須美子・松本修一  
庄野陽一・山中耕作
- 【金壹万円】 西尾健治・片岡洋一  
原田國雄・村山吉廣・星野 玄  
甲本達也・吉原湖水・黒川邦彦  
佐野 至・宮崎春夫・桑形シズエ  
大里豊男・辻本雅史・花村信也  
橋本敏夫・末松仙太郎・青柳繁樹  
小山元治・富田英寿・板木継生  
大塚博久・荘山雅敏・桑野 顕  
永岡喜代太・安永友儀・岩永 皓  
河村新一・岡本金蔵・市丸義春  
財部一雄・神谷 誠・田代直輝  
佐々木 謙・森 重人

現在、孔子廟の成立状況は講堂建築がおくれています。年内の完工を期し、来春早々には文庫聖堂での行事を「毎月の第一〜四週各土曜午後を定日に第一週「論語」、第二週「老子」以下三週「史記」、四週は「葉根譚」各講座を開講。その他を發表いたします。

創元会・原様に訂正とお詫び  
本誌前号で油彩50号「臼杵の石仏」のご寄贈と作者原 友一様の紹介に作者ご所属「創元会会友」を会員と誤記し、創元会と原様に大層ご迷惑の次第、茲に修正してお詫びします。

・能古博物館ご案内・

開館 9:30~17:00 (入館16:30まで)  
休館日 毎週月曜  
(月曜日が祝日の場合は次の日)  
12月29日~1月2日  
入館料 大人300円・中高生200円  
交通 姪浜 能古行渡船場→フェリー(10分)  
→能古(徒歩5分)→博物館  
〒819 福岡市西区能古522-2  
☎(092) 883-2881・2887  
FAX(092) 883-2881